

寄り添い支援 言動変える

ソーシャルワーカーによる寄り添い支援が、カスハラ行為に及んだ患者の言動を変えることもある。

「病院を脱走するなんて、今思えば、申し訳ないことをした……」。宮城県の男性(78)は、恥ずかしそうに語る。大腸がんとアルコール依存症を患い、入退院を繰り返している。

県内の病院に入院していた2022年秋、病室を抜け出し、タクシーで家に帰った。入院中は「病院にいてもしょうがないだろう！」

と医師に感情をあらわにした。指示通りに薬も飲まなかった。「治療の終わりも見えない。お酒も飲めない。いらいらしていた」と、男性は振り返る。

入院先の依頼を受けて治療にあたったのが「穂波の郷クリニック」(大崎市)だ。在宅で暮らすがん患者らの緩和ケアに取り組む。ゼネラルマネージャーで医療ソーシャルワーカーの大石春美さんが患者らの悩みに耳を傾け、介護保険に基づく生活支援も行う。

大石さんはアルコールに頼ったり、周囲に暴言を吐いたりする男性の事情を探った。ケアマネジャーと連日、自宅を訪れて徐々に男性との距離を縮めた。出身、仕事の経歴、家族関係……。身内の人にも話を聞いた。

男性は長年、トラックの運転手を務め、家を空けることが多く、「家族と話す機会はほとんどなかった」。退職後は日中から一人でお酒を飲んでばかり。そこへ病気が重なった。「孤独を埋める居場所が必要」と、大石さんは考えた。

クリニックは定期的に患者らが思い出を語り合う場などを設ける。参加者は毎回、会場で血圧や体温などを測るが、大石さんはその数値を資料に書き込む作業を男性に頼んだ。ドライバ―時代、運転業務に関わる日報を丁寧に書いていたこ

とを知っていたからだ。男性は、作業を通して参加者らと親しくなり、会の準備を手伝うようになった。

男性が以前、CDを製作していたこともわかった。

大石さんは、地域住民が運営するのど自慢大会の実行委員に男性を誘い、歌声も披露してもらった。熱唱している時の様子を撮影した写真を見せながら、男性は笑顔で言う。「大石さんたちのおかげで張り合いができたよ」。最近は酒量も減りつつあるという。

同クリニック院長の三浦正悦さんは「医療だけでは、患者の生きる力を引き出せない。患者の人生を包み込める人の支援が欠かせない」と大石さんの取り組みの意義を強調する。

自身も患者らからひどい言葉を浴びせられることもあるが、大石さんは言う。「ハラスメント行為に及ぶのは『助けて』という患者のメッセージ。覚悟を決めて向き合えば、相手は変わっていくはず」

大石さんは「患者さんの心と体に寄り添いたい」と語る大石さん(宮城県大崎市で)



「患者さんの心と体に寄り添いたい」と語る大石さん(宮城県大崎市で)